

# 天探女と石船

——『万葉集』の中の 神話——

井 上 さやか

## 一 はじめに

『万葉集』には、「神」の語を含む歌が二三〇首以上収められているが、その多くは、名詞 神なび や動詞 神さぶ、副詞 神ながら などである。一方で「八千矛神」（六一〇六五）など記紀神話にも登場する神名を詠み込んだ歌も若干数みられ、「大汝少彦名」（三三五五）のように、「神」の語を含まないものの記紀神話に登場する神とみなせる名が詠まれた例もある。本稿では、そうしたなかでも葦原中国平定の神話に登場する「天探女」を詠んだ、次の歌群に着目しておきたい。

### 角麻呂の歌四首

あま さぐめ いはふね は たかつ あ  
ひさかたの天の探女の石船の泊てし高津は浅せにけるかも

（三二九二）

## 角麻呂歌四首

久方乃 天之探女之 石船乃 泊師高津者 淺尔家留香裳

塩干の三津の海女のくぐつ持ち玉藻刈るらむいざ行きて見む

(3二九三)

塩干乃 三津之海女乃 久具都持 玉藻将効 率行見

風を疾み沖つ白波高からし海人の釣船浜に帰りぬ

(3二九四)

風平疾 奥津白波 高有之 海人釣船 濱着奴

住吉の岸の松原遠つ神わご大君のいでまじどころ

(3二九五)

清江乃 木笑松原 遠神 我王之 幸行處

本歌群は、作者である「角麻呂」の閲歴等が不明であり、四首がどのような意図で詠まれたものかはわかっていない。ことに二九二番歌は、「天の探女」「石船」といった神話を彷彿させることばが詠み込まれてはいるものの、現存する『古事記』や『日本書紀』に収載された神話とは異なる内容である。

本稿では、当該歌群の表現を分析することを通して、歌群の構成と記紀神話とは異なる 神話 が歌に詠まれた意味について考えてみたい。

## 二 従来の議論と問題点

従来、注釈書類において、作者である「角麻呂」について、二九三番歌の「潮干」「海女」の訓について、二九五番歌の「笑」字の異同および訓について、などが論点となってきた。

二九三番歌の「塩干乃」「海女乃」の訓については、紀州本万葉集など複数の古写本でシホカレノ、アマメノとされており、仙覚『萬葉集註釋』（一二六九年）も「鹽かれの」「みつのあまめの」とした。それぞれ一句の音数が五音と七音となるよう考慮した結果であると思われる、現行テキストの一部でもこの訓が踏襲されている。<sup>①</sup>ただし、荷田春満『萬葉童蒙抄』（一七二五年）が

これをしほがれのとよめる、其意得がたし。外に句例なければ信用し難き也

と指摘したように、「塩干」をシホカレと訓む例は集中になく、シホヒと訓むべきかと思われる。<sup>②</sup>

また、「海女」についても、鹿持雅澄『萬葉集古義』（一八二三年頃）が、

ミツノアマノと訓で、六言一句とすべし（舊本にアマメとよめれど、アマメと云る例なし）海女と書るは、海夫、海子など書ると、同様のこゝろなり

と指摘したように、アマと訓読するのが穩当であるだろう。<sup>③</sup>

初句が四音である例も、二句が六音である例も皆無ではなく、最近の注釈書でも「塩干」をシホヒ、「海女」をアマと訓んでいる。<sup>④</sup>集中の用例からみて、いずれも首肯できる訓と考える。

次に、二九五番歌の「笑」字については、前後に異同があることから、どう訓読するかという問題とともに議論されてきた。当該歌の現存最古の写本は紀州本であるが、そこには「清江乃野木笑松原」とあり、集中では「笑」がノにあてられていることから、スミノエノキノギノマツバラと訓読されてきた。しかし、類聚古集には「清江野木笑野松原」とあり、「笑」字は本来の音がシ、訓がヤ（矢）であることから、スミノエノキシノマツバラと訓読できる。「住吉の岸の」という例が多い（六九三、七一四四、七一五九など）こともあつて現行テキストの多くはこちらに拠っており、穩当であると考ええる。

当該歌群の作者である「角麻呂」については、契沖が『万葉代匠記』初稿本（一六八七年）において、

是は続日本紀に見えたる角兄麻呂を、兄の字をおとせるなるべし

と指摘したことから、「角兄麻呂」なる人物であるとされてきた。また、橘千蔭『萬葉集略解』（一七九六年）は、

こゝは用を角に誤、兄を脱せしなるべし。續紀に、此氏を録とも用とも書り。字書は用音録とあれば、通し用ひしもの也

として、本来はロクノエマロという人物であるとした。

『続日本紀』大宝元年八月条に、惠耀という僧侶が勅によつて還俗し本姓である「録」に復した記事が見え、「姓は録、名は兄麻呂」であつたという。同書養老三 years 正月条には、正六位上の「角兄麻呂」が従五位下を授けられた記事もあり、同一人物であると考えられている。金子元臣『萬葉集評釋 第二冊』（一九三八年）は、養老五年正月条に「陰陽従五位下用兄麻呂」が物を賜つた記事に着目し、「この作者の本姓が録であり、陰陽道の達者である点から見ると、その先は韓国あたりの帰化人であつたらしく思はれる」とも述べている。

一方、吉澤義則担当『萬葉集總釋 第二』（一九三五年）は、「角麻呂は傳未詳」であるとした。山田孝雄『萬葉集講義 第卷三』（一九三七年）も、代匠記以降の諸説を整理した上で次のように指摘している。

古来一の本もそれらの一件をも證するに足るべき證を見ず。況んや二件共においてをや。又、「角兄磨」の「兄」を脱せりといふも憶測に止まる。

従つて、「伝未詳」とするのが穏やかであると結論している。

戦後の注釈書類ではこれを踏襲するものが多く、その上で、『新撰姓氏録』に載る「角朝臣」や、『日本書紀』雄略天皇九年五月条にみえる周防の「角臣」、同天武天皇一三年三月条の「都努臣牛甘」、同年十一月条の「角臣」

の朝臣賜姓記事、『古事記』孝元天皇条の「都奴臣」など、「角」氏に関わる記事の指摘がなされている。とはいえ、「角麻呂」は、史書に名が見えず、『万葉集』中においても本歌群を残すのみであり、やはり伝未詳としか言いようがない。

伊藤博『萬葉集釋注 二』（一九九六年）は、当該歌群を「難波に遊んでの歌 起承転結の構成を持つと読める」とし、角麻呂は伝未詳ながら、「四首をそれぞれ孤立させての従来の鑑賞は、作者にとつていたく不服なことにちがいない」と指摘した。

ただ、「歌四首」と作者名を題に冠してまとめられた四首は、詠まれた時期や主題が一致しない場合も多い。<sup>(5)</sup> また、『萬葉集釋注』は「凡例」に

これまでの万葉集の注釈書は、一首ごとに注解を加えることが一般であった。だが、万葉歌には、前後の歌とともに歌群として味わうことによつて、はじめて真価を表わす場合が少なくない。そこで本書においては、歌群ごとに本文を提示し、これに注解を加えるという方針をとつた。

と明記しており、歌群として捉えることを第一義とするところに特徴がある。果たして当該歌群は、伊藤氏が指摘するように緊密な構成であるのか否か、表現の分析を踏まえてあらためて考えてみる必要もあるだろう。

後述するように、二九二番歌の「石船」と「天探女」との伝承については、現存する記紀神話とは異なっており、諸注釈書では「摂津国風土記逸文」との類似が指摘されてきた。当時の「神話」が『古事記』『日本書紀』に書かれた内容だけでなかったことは言うまでもないが、それをどのような契機で知り得、どのような意図で歌として詠んだのか、現存資料から明らかにできることは少ないが、興味は尽きない。

以上のように、歌群四首の構成についてと歌に詠まれた 神話 についてとが、当該歌群における目下の課題

であると考える。

### 三 記紀における天探女と石船

当該歌群の第一首である二九二番歌については、はやくに藤原清輔『奥義抄』(一二二四年)―一二四四年)が、『日本書紀』巻第三神武天皇三十一年四月条をあげ、

天磐船にのりたりしものは、河内国に磐船明神とておはす。歌のおこりは、このことそ待め<sup>6</sup>。

(『奥義抄』中巻二十六)

と指摘した。

また、『順徳院』『八雲御抄』初稿本(一二二二年頃)にも言及がある。

いは 国見するなといへり 天神駕給也 万久かたのあまのさくめかいは舟のとめしたかつはあせにけるか<sup>7</sup>  
も

(巻第三枝葉部 雑物部付調度「舟」の項)

歌語「いは舟」の解説に当該歌を引用し、天神の乗る物であり、国見をするとも指摘されている。ただ、天神とはいっても、当該歌に詠まれた「いは舟(石船)」の主は「あまのさくめ(天之探女)」であり、『八雲御抄』でもそれが強調されている。

あまのさくめ 岩舟のぬしなり

(巻第三枝葉部 人倫部「人」の項)

北村季吟『萬葉拾穂抄』巻第三(一六八六年)は、このことについて次のように指摘している。

ひさかたのあまのさくめ 天探女は無名雉を奇 鳥来れりと天稚彦に告たる事日本紀二に有 高津は津の<sup>8</sup>

国なり。彼天稚彦天神アマノカミの御使いにて弓矢を給りて下りける時、天探女も岩船にのりてくたりて此高津にとまりし、其岩船とて磐の大なるか埋れて今も此所に在とかや。奥義抄には、此歌の注に日本紀神武天皇の記に天岩船アマノイサナフネに乗て飛降れる物有といふを引て、其岩船に乘し物は河内に磐船明神とておはす此事の由有。是は饒速日命ニギハヤヒノミコ也。国も別也。

「饒速日命」の乗る「天磐船」の挿話を河内の「磐船明神」と結びつけた『奥義抄』に対して、神名も国名も異なると反論している。一方で、「天探女」は『日本書紀』巻第二（神代卷下）にみえ、無名雉を「奇鳥来れり」と天稚彦に告たこと、天稚彦天神が弓矢を給り下る時、天探女も岩船に乗つて下り来て高津に留まったこと、が紹介され、その際の岩船とされる大磐が今もその場所にあるという。

しかし、天稚彦に「奇鳥来れり」と告げるエピソードは確かに神代紀にみえるが、それ以外は現存する『日本書紀』にはみられない内容である。「磐船」についても、現存する大岩に比定していることから石製の船と解しているようであるが、現代では堅固な船と解するのが一般的である。

これに先立つて、下河辺長流『萬葉集管見 第三巻』（一六六一年頃）も、次のように記している。

久かたの天のさく女か石船 久かたは、天といはん枕ことはなり。わか国開闢のはしめをいふにも天先成て地後に定ると云々。よりて久しく堅しといふ心なり。天のさく女は、鬼の名なり。むかし天孫を、天くたし奉りて、葦原の国のあるしとなさんと思しめしけるに、其国に邪神おほかりければ、先そのあし神をたいらけよとて、天稚彦といふ神に、天津神の弓矢をたまはせて、くたし給ふ時に、天の探女もともに天の磐船にのりてくたりて、難波の高津にとまれることをよめるなり。そのいは舟なりとて、大きな岩の埋れて、今に此所には侍るなり。

やはり、天探女は天稚彦とともに天の磐船に乗って天より下り、難波の高津にとまったとし、その石船だとされる大きな岩が今もあるとしている。さらに天探女とは「鬼の名」であるともいう。繰り返しになるが、これらは『日本書紀』にはないエピソードである。

一方、『石船』は、『古事記』においてはイザナキ・イザナミの生んだ神として「鳥之石楠船神」や「天鳥船」（『古事記』上巻）とあるものや、『日本書紀』において蛭児を載せて遺棄したという「天磐櫂樟船」（『日本書紀』卷第一神代上「第五段」正文）、大己貴神が海に遊ぶために造った「天鳥船」（『日本書紀』卷第二神代下「第九段」一書第二）などとの関連も考えられるが、次にあげる『日本書紀』神武天皇条に登場する「天磐船」がもっとも関連深いと考えられ、『奥義抄』以来、多くの注釈書で指摘されてきた。

抑又、聞於塩土老翁。曰、東有美地。青山四周。其中、亦有乘天磐船而飛降者。余謂、彼地必当足以恢弘大業、光宅天下。蓋六合之中心乎。厥飛降者、謂是饒速日歟。何不就而都之乎。

「抑又、塩土老翁に聞きき。曰ししく、『東に美地有り。青山四周れり。其の中に、亦天磐船に乗りて飛び降る者有り』といひき。余謂ふに、彼の地は、必ず大業を恢め弘べ、天下に光宅るに足りぬべし。蓋し六合の中心か。厥の飛び降る者は、謂ふに是饒速日か。何ぞ就きて都つくらざらむや」とのたまふ。」

（『日本書紀』卷第三 神武即位前紀甲寅年十月）

三十有一年夏四月乙酉朔、皇輿巡幸。因登腋上嚙間丘、而迴望国状曰、妍哉乎国之獲矣。

妍哉 此云貌奈瑣瑣。

木綿之真沓国、猶如蜻蛉之聲帖焉。由是始有秋津洲之号也。昔伊奘諾尊目此国曰、日本者浦安国、細戈千足

国、磯輪上秀真国。秀真国 此云地固不句嘴。復大己貴大神目之曰、玉牆内国。及至饒速日命乘天磐船而翔行太虚也、睨

是郷而降之、故因目之、曰虚空見日本国矣。

「三十有一年の夏四月の乙酉の朔に、皇輿巡幸す。因りて腋上の噺間丘に登りまして、国状を廻望みて曰はく、「妍哉、国獲つること。妍哉 此には秋奈理夜と云ふ 内木綿の真匠国と雖も、猶し蜻蛉の聲咭せるが如もあるかも」とのたまふ。是に由りて、始めて秋津州の号有り。昔伊弉諾尊、此の国を目けて曰はく、「日本は、浦安の国、細戈の千足る、国、磯輪上の秀真国」とのたまひき。秀真国 此には根國芥句備と云ふ 復己貴大神、目けて曰はく、「玉牆の内つ国」とのたまひき。饒速日命、天磐船に乗りて、太虚を翔行り、是の郷を睨みて降りたまふに及至りて、故、因りて目けて、「虚空見つ日本の国」と曰ひき。」

（『日本書紀』卷第三 神武天皇三十一年四月）  
 ただ、『萬葉拾穂抄』が指摘したとおり、ここに描かれた「天磐船」の主は「饒速日命」であるのに対して、万葉歌では「天探女」である。この相違をどのように考えればよいのだろうか。

ここで、『日本書紀』における天探女の登場箇所を確認しておきたい。

其雉飛降、止於天稚彦門前所植植 此云多底鷹 湯津杜木之杪。杜木 此云可豆魂

時天探女天探女 此云阿麻能左磨諾 見、而謂天稚彦

曰、奇鳥來居杜杪。天稚彦乃取高皇產靈尊所賜天鹿兒弓・天羽羽矢、射雉斃之。其矢洞達雉胸、而至高皇產

靈尊之座前也。杜木 此には可豆魂と云ふ 時に天探女天探女

「其の雉飛び降り、天稚彦が門前に植てる植 此には多底鷹と云ふ 湯津杜木の杪に止る。杜木 此には可豆魂と云ふ 時に天探女天探女

尊の賜りし天鹿兒弓・天羽羽矢を取り、雉を射て斃す。其の矢、雉の胸を洞達りて、高皇產靈尊の座前に至る。」

（『日本書紀』卷第二 神代下「第九段」正文）

其雉飛下、居于天稚彦門前湯津杜樹之杪、而鳴之曰、天稚彦何故八年之間未有復命。時有国神、号天探女。

（『日本書紀』卷第二 神代下「第九段」正文）

見其雉曰、鳴声惡鳥、在此樹上。可射之。天稚彦乃取天神所賜天鹿兒弓・天真鹿兒矢、便射之。則矢達雉胸、遂至天神所処。

「其の雉飛び下り、天稚彦が門前の湯津杜樹の杪に居て、鳴きて曰く、「天稚彦、何の故にか八年の間未だ復命有らぬ」といふ。時に国神有り。天探女と号ふ。其の雉を見て曰く、「鳴く声悪しき鳥、此の樹上に在り。射るべし」といふ。天稚彦、乃ち天神の賜りし天鹿兒弓・天真鹿兒矢を取り、便ち射つ。則ち矢、雉の胸より達りて、遂に天神の所処に至る。」

（『日本書紀』卷第二 神代下「第九段」一書第二）

神代下第九段の正文（一）では、天探女が天稚彦に「奇しき鳥来り」と告げたことで、天稚彦が天鹿兒弓・天羽矢で雉を射て斃すことになる。これが返し矢となつて天稚彦も死亡する。一方、同段の一書第一（一）では、天探女は雉の「天稚彦、何の故にか八年の間未だ復命有らぬ」という声を聞き取つて、天稚彦に「鳴く声悪しき鳥」であることを告げ、さらに「射るべし」と言つ。においては、雉を射たのは天稚彦の判断であるといえるが、においては、天探女の判断に従つたかたちで天稚彦が雉を射ることになっている。どちらにおいても、天探女は天神から遣わされてきた雉の性質を見抜く力を有している者として描かれているが、とくに天探女は、天稚彦は理解できなかったとみられる雉の 鳴き声 を、意味のある 言葉 として聞き取る特殊な能力を持つ者として位置付けられている。その一方で「国神」であることが明記されており、天稚彦が葦原中国に留まり天神の命に背くことにより落命する構造が、より明確に描かれているといえる。

あわせて、『古事記』においてはどのように記されているのかも確認しておきたい。

故尔、天照大御神・高御産巢日神、亦問諸神等、天若日子、久不復奏。又遣曷神以問天若日子之淹留所由。於是、諸神及思金神、答曰、可遣雉名鳴女時、詔之、汝行問天若日子状者、汝所以使葦原中国者、言趣和其

国之荒振神等之者也。何至于八年不復奏。

故爾、鳴女、自天降到、居天若日子之門湯津楓上而、言委曲、如天神之詔命。爾、天佐具壳、此三字以寄聞此

鳥言而、語天若日子言、此鳥者、其鳴音甚惡。故、可射殺、云進、即天若日子、持天神所賜天之波土弓・天之加久矢、射殺其雉。爾、其矢、自雉胸通而、逆射上、逮坐天安河之河原天照大御神・高木神之御所。

「故爾到天照大御神、高御産巢日神、亦諸の神等に問ひたまひしく、「天若日子久しく復奏さず。又曷れの神を遣はしてか、天若日子が淹留まる所由を問はむ。」とひとたまひき。是に諸の神及思金神、「雉、名は鳴女を遣はすべし。」と答へ白しし時に、詔りたまひしく、「汝行きて天若日子に問はむ状は、『汝を葦原中国に使はせる所以は、其の国の荒振る神等を、言趣け和せとなり。何にか八年に至るまで復奏さざる。』ととへ。」とのりたまひき。

故爾くして、鳴女、天より降り到りて、天若日子が門の湯津楓の上に居て、言の委曲けきこと、天つ神の詔命の如し。爾くして、天佐具壳、此の鳥の言を聞きて、天若日子に語りて言はく、「此の鳥は、其の鳴く音甚惡し。故、射殺すべし」と云ひ進むるに、即ち天若日子、天つ神の賜へる天のはじ弓・天のかく矢を持ちて、其の雉を射殺しき。爾くして、其の矢、雉の胸より通りて、逆まに射上がりて、天の安の河の河原に坐す天照大御神・高木神の御所に逮りき。」  
(「古事記」上巻)

神名の表記は「天佐具壳」と『日本書紀』とは異なるが、先に見た とよく似た内容である。『古事記』と『日本書紀』一書第一との類似は、当該部分に限らず随所に窺うことができる。

の『日本書紀』とよく似た内容ではあるが、では、「此の鳥の言を聞きて」と、「鳴女」の鳴き声を「言」と明記している点が留意される。「言の委曲けきこと、天つ神の詔命の如し」と表現され、発言内容は直前の部

分を参照することによって知られるが、ここではさらに、なぜ天若日子を葦原中国に使わしたかについても言及しており、それを踏まえて天佐具売が鳥の 鳴き声 を「言」として理解する者として描かれている。天若日子は、大国主神の娘である下照比売を妻とただけでなく、天佐具売の発言によって天に弓を引くのである。

総じて、隠れた物事を探り出し顕在化させる能力がある女という意味であるとみられ、サグメの名に相応しい特性である。

その名に「天」を冠することから、天稚彦に付き従って天から下ってきたともされるが、<sup>(8)</sup> にあるとおり「国つ神」であるとの記述があることは看過できない。名に「天」を冠しながらも天から下り来た神ではない例は、他にも「天津豊媛命」(孝昭紀)、「天日槍/天之日矛」(垂仁紀/応神記)、「天事代虚事代玉籤入彦巖之事代神」(神功紀) などがある。「天」は一種の美称としても用いられたかと考えられる。

少なくとも、いずれにせよ、天探女が石船に乗って天から下り来たという直接の描写はなく、「石船の主」という記述もない、ということを確認しておきたい。

#### 四 撰津国風土記逸文における天探女と石船

上述の問題点を解消したのが、下河辺長流『続歌林良材集』上巻(一六七七年刊)に採られた「撰津国風土記逸文」の記事であったといえよう。

##### 天の岩船の事

日本紀異聞歌  
付天のさく女かいし舟

一 飛かける天のいは船たつねてそ秋つ嶋には宮はしめける

右日本紀竟宴に神武天皇をよみ奉るうた也。…中略…かれ天の岩船に駕してあまなく虚空をめくります時、是郷コノノを見て天くたりて、空みつやまとの国とはの給ひそめしなり。萬葉十九家持か長歌に、あきつ島やまとの国を天雲にいは舟つけてともにへにまかいしゝぬきいこきつゝ国見ししてあもりましはらひたひらけなとよめり。今河内国に磐舟の明神とておはするはかの饒速日をいはひ申と云々。亦萬葉に角麻呂かうたに云、  
 久かたの天のさく女かいは舟のはてし高津はあせにけるかも

右天のさくめか岩イハふねは亦別の事也。津国風土記に云、難波高津は天稚彦天下りし時、天稚彦に属て下れる神天の探女サクメ磐舟に乗して爰に至る。天磐舟の泊る故を以て高津と号すと云々。萬葉一本に天のさくめか鳥船ともよめり。

これにより、同じく下河辺長流の著した先掲の『萬葉集管見』（一六六一年頃）も、北村季吟『萬葉拾穂抄』（二六八六年）も、記紀にはない伝承ではあるが、古風土記の伝える伝承と考えて注を付したとみられる。しながら現代の目で見ると、この「撰津国風土記逸文」に奈良時代の伝承が記されていたかどうかは疑問である。伊藤純氏は次にあげる「神趾名所小橋車」を参照し、漢文体で記されていることに着目して、当該の「撰津国風土記逸文」は古態を伝えていると結論した。<sup>9)</sup>

撰津国風土記曰。難波高津者、天稚彦天降臨之時、属天稚彦而降臨天探女、乘磐舟而至于此。以天磐船泊故、号高津云々。  
 （釈聖観『神趾名所小橋車』巻上）

大阪歴史博物館「大阪歴史博物館蔵品複製本公開資料」に拠ると、『神趾名所小橋車』は、寛政元年（一七八九）に記された東成郡小橋村付近の地誌であり、天明八年（一七八八）小橋村に來住した僧寂聞聖観が、村の神社から発見された古神宝を見て当地を古書に見える味原郷と判断、そこに展開した古跡を考証して記した書で

あるという。しかし、下河辺長流『続歌林良材集』から一〇〇年以上も後に記された書であり、漢文体というだけで古風土記の伝承であるとも言い難いように思われる。新編日本古典文学全集『風土記』においても、当該の「撰津国風土記逸文」については「古風土記の逸文とは認められない後世の風土記の断片等で、研究史上よく引用されてきたもの」とみなし、「参考」として掲載している<sup>10)</sup>。

近世において、当該の伝承が流布したことは、『撰津名所図会』（一七九六～八年刊）でも確認できる。

磐船旧蹟 小橋村の西南、田圃の中に一堆の丘あり。字を下至土野原といふ。土人は俗に磐船山とよぶ。是則天探女命磐船に乗りて天降り給ふ時、其とゞまりし地なりとぞ。故に高津といふ名あり。下至土野原といへるは、その磐船土中に鎮座し給ふよりも下至土と呼べり。これ比売古曾大神の御正体なり。此磐船土中に蔵れましゝぬるよりも、比売語曾といふ。

「風土記」に云ふ、天探女。乗磐船至于此。以天磐舟泊。故号高津云々。「萬葉」の註これに同じ。…中略…又順徳院の。「八雲御抄」にも、あめのいはふねの泊る所を高津といふとぞ記し給ふ。…中略…

#### 萬葉

久堅のあめの探女がいはふねのはてし高津はあせにけるかも

角 麿

ここでは、『八雲御抄』や『萬葉集註』などの注釈書の記事が引かれ、それらをもとに土地の伝説なども盛り込みつつ内容が展開されていることがわかる。

さらに同書では、天探女について、比売許曾神社の祭神であり天稚彦命の妻である「下照比売命」の別名とも言及されている。

比売許曾神社 味原郷小橋村にあり。「延喜式」に曰く、東生郡比売許曾神社、名神大、月次相嘗・新嘗…後略…

祭神下照比売命 大己貴命の御女にして、天稚彦命の妻、味耜高彥命の妹なり。亦の名、稚国玉媛、或は

天探女とも号す。神代に天磐船に駕り給ひ、此地に天降り給ふにより、高津と号しける。

この比売許曾神社については、『古事記』に次のような記事がある。

故、赦其賤夫、将来其玉、置於床辺、即化美麗嬖子。仍婚為嫡妻。尔、其嬖子、常設種々之珍味、恒食其夫。故、其国主之子、心奢詈妻、其女人言、凡、吾者、非応為汝妻之女。将行吾祖之国、即窃乘小船、逃遁度来、

留于難波。

此者坐難波之比売曾神社、謂阿加流比売神者也

「故、其の賤しき夫を赦して、其の玉を將ち来て、床の辺に置くに、即ち美麗しき嬖子と化りき。仍ち婚ひて、嫡妻と為き。爾くして、其の嬖子、常に種々の珍味を設けて、恒に其の夫に食ましめき。故、其の国主の子、心奢りて妻を詈るに、其の女人が言はく、「凡そ、吾は、汝が妻と為るべき女に非ず。吾が祖の国に行かむ」といひて、即ち窃かに小船に乗りて、逃遁げ渡り来て、難波に留まりき。

此は難波の比売曾神社に坐す阿加

流比売神と謂ふ」

（『古事記』中巻・応神天皇条）

これは「天之日矛」と「阿加流比売神」との挿話であり、同じ摂津国内で「天」を冠する名であるとはいえず、『摂津名所図会』が「比売暮曾社」の祭神下照比売命と天探女を結びつけた理由は明確ではない。ただ、次にあげる謡曲「岩船」が影響を与えた可能性も考えられる。

ワキ・ワキツレ げに治まれる四方の国。げに治まれる四方の国。関の戸さゝで通はん。

ワキ そもくこれ八当今に仕え奉る臣下なり。さても我が君賢王にましますにより。吹く風枝を鳴らさず。民戸ざしをささず。実にめでたき御代にて候。さる間摂州住吉の浦に。始めて浜の市を立て。高麗唐土の宝を買ひ取るべしとの宣旨に任せ。只今津の国住吉の浦に下向仕り候。

ワキ・ワキツレ げに今とても神の代の。 げに今とても神の代の。 誓ひ八尽きぬ証とて。 神と君との御恵み。  
真なりけり。 ありがたや真なりけりありがたや。

シテ 我ハこれ。 下界に住んで神を敬ひ君を守る秋津島根の。 龍神なり。

地 あるひは神代の嘉例を移し。

シテ 又八治まる御代に出でゝ

地 宝の御船を守護し奉り

シテ 勅も重しや勅も重しやこの岩船

地 宝を寄する波の鼓。 拍子を揃へてえいやゝ。

シテ 引けや岩船

地 天の探女ハ

シテ 波の腰鼓

地 ていとうの拍子を。 打つなりやさゝら波経廻り廻りて。 住吉の松の風。 吹き寄せよえいさ。 えいさらえいさと。 押すや唐艫の。 押すやから艫の潮の満ち来る波に浮かんで。 八大龍王ハ。 海上に飛行し御船の綱手を手に繰りから巻き。 汐に引かれ波に乗つて。 長居もめでたき住吉の岸に。 宝の御船を着け納め。 数も数万の捧げ物。 運び出すや意の如く。 金銀珠玉八降り満ちて。 山の如く津守の浦に。 君を守りの。 神八千代まで栄つる御代とぞ。 なりにける。

(二十四世観世左近訂正ノ観世流大成版『岩船』 檜書店 二〇一一年)

「高津」の名こそ登場しないものの摂津国住吉の話として展開し、「岩船」も「宝の御船」とされているが、そ

の船の主は「天の探女」と謡われる。当曲のシテは龍神であり、神代の嘉例としての言及とはいえ、角麻呂が詠んだ歌の要点は継承されている。

謡曲「岩船」については、成立年・作者ともに不詳であるが、音阿弥による上演記録（『飯尾宅御成記』寛正七年 一四六六）が確認できる記録としては最古であるという。<sup>11</sup> 謡曲に取り入れられる際には本来の伝承そのままだはなく適宜改変されることが常であり、「岩船」でもそのままでの内容が中世の伝承であったとは考えていない。<sup>12</sup> 観世流大成版「岩船」の解説には次のようにある。

本曲は天の探女が難波津に天降つたといふ説話に拠つたもので、万葉集卷三には、「久方の天の探女が石船の泊てし高津は浅せにけるかも」といふ角兄麻呂の歌を載せ、又摂津風土記にも、「難波の高津は、天稚彦天降りし時、之に属きし神天探女磐船に乗りて爰に至り、其磐船の泊てし所なるが故に、高津と号ぶ」と見えてゐる。然し、是等は何れも、古事記応神天皇の条に、「また昔、新羅の国王の子、名は天之日矛と謂ふあり。（中略）其の妻の遁れしことを聞きて、乃ち追ひ渡り来て、難波に到らむとする程に、其の渡の神塞へて入れざりき。かれ更に還りて、多遲摩の国に泊てつ。（中略）かれ其の天之日矛の持ち渡り来つる物は、玉津宝と云ひて、珠二貫、又振浪比礼、切浪比礼、振風比礼、切風比礼、又奥津鏡、辺津鏡、并せて八種なり」とある天之日矛の妻即ち阿加流比売神を天の探女と混同したものである。<sup>13</sup>

これまでみてきた摂津国風土記逸文などと記紀との相違に加えて、『古事記』応神天皇条の「天之日矛」と「阿加流比売神」との挿話を指摘している。折口信夫が『口訳万葉集』（一九一六年）において、二九二番歌を昔からの傳へに、朝鮮から其夫の手を逃れて、我が國にやつて來た、あの天の探女の岩船が到着した、と云ふ浪速の高津は、水が浅くなつてしまつて、その頃の佛も残つていないことよ。

と訳したのは、能楽に精通していたことから謡曲「岩船」を踏まえたものと思われる。先掲の『撰津名所図会』が「比売暮曾社」の祭神の別名を「天探女」としたのも、こうした中世の伝承が影響していたと考えられる。

当該歌の現存最古の写本は、紀州本であり、巻一―十は鎌倉末期（一四世紀）の書写とされる。一三世紀に仙覚が諸本を校合し新点を付して以降、『万葉集』の書写が盛んになったとみられ、同じ一四世紀に西本願寺本万葉集なども書写された。それに伴い注釈書類も増えたと考えられており、そうした時代的な背景にも拠るものか、中世に大成した能の中にも天探女と岩船の伝承が取り入れられたことは興味深い。

いずれも後世の附会であることは言うまでもないが、新たな内容が付加され伝承が流布していく過程を垣間見ることが出来る。翻って、古代において「天探女」と「石船」「高津」を結びつけた資料は角麻呂の万葉歌以外には現存しない。しかしその内容は、時代を超えて人々の興味を引き、いわば新たな神話の根拠となったといえよう。

## 五 四首の構成

最後に、それぞれの歌の表現から角麻呂歌四首の構成について考えてみたい。

伊藤博氏は当該歌群について、「難波に遊んでの歌」とし、「起承転結の構成を持つ」と指摘した。<sup>(15)</sup> また、阿蘇瑞枝氏も「一見四首は不統一で興味が分散しているようであるが、第四首で全体を総括しており、難波離宮周辺を讚美した歌とわかる」と指摘している。<sup>(16)</sup>

「高津」といえば、一般的には記紀にみえる仁徳天皇の難波高津宮が想起され、『万葉集』においても、「難波

高津宮御宇天皇代」の歌として磐姫皇后の歌とされる相聞歌（2八五、八九）が収載されている。ただ、歌中に詠まれた「高津」は当該歌だけであり、それが仁徳天皇ではなく天探女の伝承と結びつけられていることが留意される。しかし、天探女と「高津」との関連が記紀にない内容であることは先述のとおりであり、ここは地名というよりも、天から下り来た神が泊まる「津（港）」として、「高」を冠した可能性があるのではないだろうか。「高殿を高知りまして」（1三八）、「高照らす日の御子」（1四五）、「高光る日の朝廷」（5八九四）などにみられる「高」は、褒め言葉であり、当該歌の「高津」もそうした概念を含む表現なのではなかったかと考える。

その「高津」が浅くなってしまうたと詠むことで遠い過去を想起させ、時間の経過によって変容した現景観を認識させている。同様の手法は次の歌にもみられる。

三年辛未に大納言大伴卿の寧樂の家に在りて故郷を思へる歌二首（第一首）

しましくも行きて見てしか神なびの淵はあせにて瀬にかなるらむ （6九六九）

この歌は、天平三年（七三一）に大伴旅人が詠んだ、平城京の家にあって故郷をしのぶ歌である。「万葉集」において「故郷」として回顧されるのは飛鳥であった。<sup>17</sup>「神なびの淵」と表現されたのは明日香川の淵であり、川の流れによって淵が瀬に変わることは、後世において歌枕化した「明日香川」の主要なモチーフともなっていた。<sup>18</sup>ただし、当該歌では、後世のように昨日・今日・明日の言語遊戯的な要素を含み、川の流れの速さを表現するのではなく、淵が瀬になるまでにかかる時間の経過を表現しようとしたと考えられる。そうであればこそ、飛鳥から藤原京へと遷都して四十年近くを経て、懐かしい故郷・飛鳥をしのぶという題が生きてくる。

二九二番歌の「高津」は、天から下りてきた船が泊まった概念的な場所としつつも、おそらくは現実の港の機能を念頭に「浅せにけるかも」と表現されており、旅人歌と同じように、時間の経過を表出するための描写であつ

たとえられる。あるいはそのために、仁徳天皇の時代よりも古い、神話を盛り込んだ可能性もある。その

神話が現存資料中にみえないとはいえず、歌中での働きとして重要なのは「浅せにけるかも」という慨嘆を導くことであることには変わりない。そして万葉歌においては、しばしば「神代より」(113、4485、5894、133327など)という表現で遠い過去が示される。難波の地で「神代」を想起させるのに相応しい名として「天探女」がクローズアップされた可能性があると思われる。窪田空穂は、

天稚彦をいわずに、天の探女の方をいつているのは、ある特殊な精神力をもった女に魅力を感じたがため、時代性の影響があつてのことかと思われる。

としたが、次の二九三番歌との繋がりを密に捉えたとすれば、当時の海女と遠い神話世界の探女とを響き合わせる意図があつた可能性も考えられよう。

その二九三番歌では、「高津」ではなく「三津」が詠まれている。集中の用例をみると、「大伴の御津(大伴乃御津)」(163)、「住吉の御津(住吉乃三津)」(194245)、「難波の御津(難波能美津)」(204331)など、遣唐使や遣新羅使らの歌や防人歌に見出される。大阪湾が海の玄関口であつたことが窺えるが、「大伴の」「住吉の」「難波の」がそれぞれ現在の大阪湾のどこに位置するのかはあまり明確ではない。その港が潮の引いた状態であるとき、海女がクグ(莎草)で編んだ籠<sup>(20)</sup>を持って海藻を刈っているだろうとの様子を想像し、「さあ行つて見よう」と第三者を誘つように結ぶ。

玉藻刈る海少女ども見に行かむ船楫もがも波高くとも  
(6936)  
にみられるように、角麻呂にとつて海女や玉藻刈りや彼女らの持つクグツは珍しい風物であり、興趣が湧いたものと思われる。

ただし、集中で「いざむ」の表現を持つ歌には、「枕とわれはいざ二人寝む」（4六五二）、「わが舟はいざ漕ぎ出でむ」（10二〇五九）、「いざ告げ遣らむ旅の宿りを」（15三六四三）のような例があり、いずれも独白のような趣があつて必ずしも第三者に呼びかける表現ともいえないようである。また、前述のように初句と第二句が四音と六音という破調である点で、「歌いものの風格を存している」とする指摘もある。<sup>②</sup>伊藤氏は、当該歌群は行幸時の詠唱かとも言及しているが、どのような場で詠まれたのか、この表現からだけでは判断できない。

二九四番歌では、沖から浜に帰ってきた「海人釣船」が詠まれる。そのことから、沖では風が激しいので白波が高く立ったのだらうと推測する。当該歌群を「起承転結」と評した伊藤説では、

一転して、沖に高々とつねる白波に視線を向け、海人の釣舟がみな浜に帰ってしまったわねばならぬほどの難波の海の躍動をつたつ。

としているが、「白波に視線を向け」てはあらず、あくまでも浜に帰ってきた「海人釣船」を見ているのであり、視点を転じているわけではないのではないか。

武庫の海の庭よくあらし漁する海人の釣船波の上ゆ見ゆ

（15三六〇九）

のように、明らかに視点が沖にある例もあるが、当該歌の場合はむしろ「貫して」「浜」に視点があるといえよう。「海女」と同様に、「海人」も「釣船」も珍しく興趣を誘う景物であつたには違いない。

そして二九五番歌では、「住吉」の地を「遠つ神わご大君のいでましどころ」と表現する。同じ表現は「幸讃岐國安益郡之時軍王見山作歌」（一五）にもみえ、詠まれたのは讃岐であるが、「網の浦の海人娘子らが焼く塩の思ひぞ焼くる我が下心」とあり、行幸の地を顕彰するでなく、関心が「海人娘子」にある点で、角麻呂歌と通底するように思われる。両歌の作者である軍王も角麻呂ともに不詳であり、作歌年代も不明であるため、

それぞれの歌の「わご大君」も特定できない。角麻呂歌については、当該歌の次に収載された二九六番歌が、和同元年（七〇八）に上野国司に任じられた田口益人の歌であり、二八八番歌の作者である穂積老が大宝三年（七〇三）から史書に登場することから、八世紀初頭の作歌であつた可能性もある。しかしむしろ特定する必要がある表現であつたのではなからうか。五番歌においては「いでまじどころ」は単に「山」とされ、題詞にも「山を見て」としか登場しない。漠然と讃岐国の山と遠い神代とが想起されることが重要であり、それ以上の特定は必要ではなかつたのかもしれない。同様に、二九五番歌においても、特定の天皇を想起する必要はなく、遠い神の時代を想起し、今の住吉の景に情趣を添えることが重要なものではなかつたかと考える。

「住吉」は難波離宮のあつた上町台地から南に約十キロ離れているが、住吉大社のある地であり、難波行幸の際に立ち寄ることもあつた。現在とは大きく景観が異なり、古代の海岸線は社殿の近くにあつたとされる。<sup>(39)</sup>航海の神が祀られていることで知られ、海や船とのゆかりは深い。

こうしてみると、まず神話世界を想起させる「天の探女」を詠み込み、第四首目に「遠つ神」を詠み、「高津」「三津」「住吉」といった「いでまじどころ」の景として、「海女」「海人」の「玉藻刈り」や「釣り」を表現しているようにみえる。神話の時代と歌の当時とを繋ぐのは、探女の「石船」と海人の「釣船」でもあろう。角麻呂歌四首は、作歌時の状況はどうあれ、一組の歌群として『万葉集』に収載された時点で、連動させて読むことを求められているといえるのではないかと考える。

## 六 おわりに

以上のとおり、角麻呂の四首の歌について、それぞれの表現が歌の中でどう作用するかに留意しつつ読むことで、それぞれの歌の間で連動する内容が見出された。

四首の構成については、伊藤氏や阿蘇氏が指摘したように、起承転結や角麻呂自身の意図、作歌状況までを云々することはできないように思われる。ただ、四首一組の歌群として収載された段階で、一連の歌として読むべきものとなったとはいえよう。

筆者の関心は記紀・風土記に載らない伝承を伝える二九二番歌にもあった。中世・近世の注釈において、地誌や芸能といった隣接する分野も含めて新たな要素が加えられ、神話が伝承されていく様子を垣間見ることができた。同様のことは、古代にも起こっていた可能性があると思われる。記紀とは異なる神話が万葉歌に詠まれた例は、他にもみることができる（二一六七、13 三三二七、18 四〇九四、20 四四六五など）。そうした神話を伝える一例としても、当該歌を読むことができる。

『万葉集』については、中西進校注『万葉集 全訳注原文付』（講談社）一九七八年、『古事記』日本書紀については、山口佳紀・神野志隆光校注『新編日本古典文学全集1 古事記』（小学館）一九九七年、小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守校注『新編日本古典文学全集2 日本書紀』（小学館）一九九四年、に拠った。

## 註

- (1) 小島憲之・木下正俊・東野治之校注『新編日本古典文学全集6 萬葉集』(小学館)一九九四年/佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之校注『新日本古典文学大系1 萬葉集 一』(岩波書店)一九九九年
- (2) 荷田春満『萬葉童蒙抄』一七二五年/賀茂真淵『万葉考』一七六〇年頃/鹿持雅澄『萬葉集古義』一八二八年頃など
- (3) 澤瀉久孝『萬葉集注釋』卷第三(中央公論社)一九五八年/西宮一民『萬葉集全注』卷第三(有斐閣)一九八四年など
- (4) 阿蘇瑞枝校注『萬葉集全歌講義』(笠間書院)二〇〇六年/多田一臣訳注『万葉集全解』(筑摩書房)二〇〇九年など
- (5) 『磐姫皇后思天皇御作歌四首』(二八五)八、『山部宿禰赤人歌四首』(八二四二四七)ほか
- (6) 佐佐木信綱編『日本歌学大系 第一卷』(風間書院)一九五八年
- (7) 片桐洋一『八雲御抄の研究』枝葉部言語部(和泉書院)一九九二年
- (8) 新編日本古典文学全集本など
- (9) 伊藤純『摂津国風土記の逸文について』『続日本紀研究』二七四号、一九九一年四月
- (10) 上垣節也校注『新編日本古典文学全集5 風土記』(小学館)一九九七年  
なお、廣岡義隆氏による同書解説において、「参考」としてあげたものは「疑逸文」であると言及されている。
- (11) 佐成謙太郎『謡曲大観』第一巻 明治書院 一九三〇年
- (12) イザナキ・イザナミの国生みに材を採る「淡路」や、ウガヤフキアヘズに材を採る「鵜羽」などがある。謡曲と記紀神話については別稿を期したい。
- (13) 二十四世観世左近訂正/観世流大成版『岩船』 檜書店 二〇一二年
- (14) 折口信夫『口訳万葉集』巻第三/『折口信夫全集 第四巻』(中央公論社)一九六六年
- (15) 伊藤博『萬葉集釈注 二』(集英社)一九九六年

- (16) 阿蘇瑞枝『萬葉集全歌講義 第二卷(卷第三・卷第四)』(笠間書院)二〇〇六年
- (17) 上野誠「故郷・飛鳥思慕の文芸」『古代日本の文芸空間 万葉挽歌と葬送儀礼』(雄山閣)一九九七年
- (18) 世中はなにかつねなるあすかはきのふのふちぞけふはせになる(古今和歌集雑下・九三三ノ読入しらず)、ほかのせはふかくなるらしあすか河昨日のふちそわが身なりける(後撰和歌集9恋一・五二五) など
- (19) 窪田空穂『萬葉集評釈 卷第三』(角川書店)一九六六年
- (20) 山田孝雄『萬葉集講義 卷第三』(寶文館)一九三七年
- (21) 武田祐吉『増訂 萬葉集全註釋 四 卷の三』(角川書店)一九五七年
- (22) 日下雅義『古代景觀の復元』(中央公論社)一九九一年